

ジャージーによる酪農の現況

収入は米麦を上まわる

竹原 宏

飼養頭数は3,000頭に

本県には、美作集約酪農地域のジャージー地区に昭和29年からジャージー種が導入されて、現在では既に、3,000頭(推定)に増殖されております。昨年の10月1日現在の分布をみますと、真庭郡の中和村に168頭、八束村に600頭、川上村に629頭、湯原町に399頭、新庄村に116頭、美甘村に159頭、久世町に57頭、津山地区530頭、計2,658頭で、その増殖状況は非常によい成績を示しております。これらのジャージーは日量9,000kgの牛乳を生産しており、これを北部酪農業協同組合が集荷しています。蒜山地区は本年度生乳共販モデル地区に指定されて、湯原町に日量1,900kgの処理能力を持つクーラーステーションを国庫補助によって建設しております。毎日5,600kgのジャージー牛乳を大阪の雪印乳業の工場に直送しております。

黄色で甘くて、濃いジャージー牛乳は阪神で非常に歓迎されて180c.c.当り18円で飛ぶように売っております。

ジャージー牛の能力 (安い牛乳生産費)

県は昭和30年度よりジャージーの経済能力検定を続けて参っております。その成績を申し上げますと、初産2,325kg(12石)、2産2,857kg(15石)、3産3,009kg(16石)、4産3,000kg(16)、5産3,000kg(16石)、脂肪量についてみますと初産は120kg、2産148kg、3産153kg、4産153kg、5産161kg、脂肪率についてみますと、初産5・17%、2産5・25%、3産5・15%、4産5・1%、5産5・40%、又分娩してから最高乳量に到達するまでは平均35日でありました。又最高乳量は初産は13・04kg(約7升)2産16・46kg(9升)3産17・06kg(9升)4産17・99kg(1斗)と云う成績を示しております。これを総括的にみますと、乳量は、初産から産次を重ねる毎に増加し4産で最高になっています。

4産の乳量3,000kgを外国の成績に比べてみます

と少し少ないようですが、乳脂量即ちバター量は米国の全登録ジャージー牛の平均値152kgに近い数字であります。泌乳量は個体の能力に環境の力が大きく影響するので、環境を改善してやればもっと乳量は増す力が潜んでいると申せましょう。本県のジャージー牛乳の消費動向をみても、市乳としての伸びが大きく原料乳としてよりも寧ろ市乳として将来消費を伸ばした方が酪農経営のためにも利益が大きいと思われれます。そこで将来はジャージー牛をもっと大型化して、泌乳量を高めて酪農経営を更に有利にすることが大切です。昭和33年の農林省の牛乳生産費調査の結果をみますと、ホルスタイン種の生乳100kg当り2,804円となっており、これを1升当りに訂しますと52円43銭であります。これに対してジャージーは100kg当り2,264円であり、1升当り41円32銭となり、非常に安く生産されております。これを労働報酬の面からみますと、ホルスタイン種は投下労働費784円に対してその報酬は、474円で、投下労働費の60パーセントに充たないが、ジャージー種は86パーセントを充足しております。ホルスタイン種よりも経営は良いと云うことになります。この原因は、色々ありましようが、現在日本のジャージーは、草地の多い地帯に計画的に導入されておまして、自給飼料が多い関係から飼料費が安く仕上がっている関係であります。本来から云いますとジャージー種は草の利用性が高いので草を充分与えて飼えば非常に有利な牛であります。

若しこの牛をホルスタインと同様に舎飼いにして濃厚飼料を多給して飼育した場合は、その能力は非常に低下します。この逆にホルスタイン種は、草だけでは牛乳を出してくれませんが、乳量に応じた濃厚飼料を与えることは必要であり、濃厚飼料による泌乳能力はジャージー種より高いのであります。でありますから本県では、ジャージー地区を県北の山間地帯に設けて草の多い地帯にジャージーを奨励し

岡山畜産便り 1961.04

ているわけです。

草作りによって経営改善（二川地区）

真庭郡湯原町の二川地区は、農業協同組合が中心になって、ジャージーによる酪農経営を指導して現在では 258 頭のジャージーが飼われております。この二川地区は山に囲まれた寒村で米・林産物の他にはこれと云った収入源もない村でありましたが、この地区は、昭和 29 年度に 30 頭を導入し現在では 258 頭になっており、1 戸当り 3 頭平均を飼っております。この地区は、山麓の傾斜が急でありますので、傾斜地を等高線状に間隔 1～2 尺に播床を作り主としてイラリヤンライグラス、オーチャード、ラヂノクロバの混播をしており、現在では 1 頭当り 44 アールの牧野を造って放牧をしています。

この急傾斜地利用の造成牧野 10 アール当りの経費をみてみますと、整地作業費が 5,400 円、肥料代 6,500 円その他 2,600 円で合計 14,500 円を要しております。現在この牧草地から 10 アール当り 6,200kg 平均の牧草が生産されております。この地区の牧草は 4 月上旬から 11 月の下旬まで利用しておりまして、水かけ栽培を実施しておる処は 3 月から利用しています。放牧は 4 月から 11 月まで実施しております。この地区は、二川農協が中心になってジャージーの世話をしていますが、この農協の調べによりますと、夏の放牧時期は農家の 1 ヶ月の乳代による収入は平均 12,150 円でこの内購入飼料代は 2,900 円、その他の手数料 440 円、天引貯金 1,220 円を差引き、農家渡しが 7,590 円になっております。ところが冬の 12 月になりますと青草がなくなりますので牛乳代は 11,640 円でこの内購入飼料代が 5,440 円、手数料 460 円、天引貯金 1,160 円を差引き農家手渡し 4,580 円と夏の収入の 60 パーセント近く減収になっております。

辺地農業にテコいれ

またこの地区の牛乳は 1,875kg（1 升）当り 23 円～35 円位で非常に安く生産されています。この地区は、乳牛を導入以前の昭和 29 年度には地区全体で 2,500 万円の収入がありましたが昭和 34 年度には乳代による収入が増して 3,400 万円と約 1,000 万円の収入が増になっております。昭和 29 年度には、収入割合をみますと、米が 35 パーセント、林産物が 37 パーセント、その他 28 パーセントとなっております。

たので、昭和 34 年度には米収入 45 パーセント乳牛収入 31 パーセントその他 24 パーセントと大きく収入割合は変化して、乳代は米代の収入に匹敵する程の収入源となっております。又この地区でジャージー 9 頭を飼っておる農家の例をみますと水田 1 ヘクタール、畑 0・5 ヘクタールの耕地を労力 3 人で経営しており、農家収入は昭和 29 年の乳牛導入前の収入は約 30 万円で、米がその 50 パーセントの収入源で、その他は養蚕と和牛が主な収入でありましたが、4 年後昭和 33 年にはジャージー 9 頭を飼ったために、その収入は 2・5 倍の 741,000 円になり、酪農収入はその内 512,000 円となり、米の収入の 3 倍近い収入を牛がかせいでおります。又小さな経営でもジャージー 3 頭を飼ったために昭和 29 年度に 186,000 円の収入が、僅か 4 年後には 40 万円近くの収入に増えております。このように酪農は生産基盤から着実に築きあげてゆくならば、農業経営の改善に非常に効果があります。特にジャージーは適地を得れば将来大いに我々の期待に応えてくれる品種と考えます。